

2014
31号
10.15

しんじゅ 新樹

前橋市男女共同参画情報誌

情報誌「新樹」は、水と緑と詩のまち前橋をイメージし、男女平等の葉が青々と茂るようにという願いを込めました。

前橋市のホームページからでもご覧になれます

前橋市 新樹

検索

前橋市 HP→市政情報→参画・協働・交流→男女共同参画



前橋市では

まえばし Wind プラン2014

に基づき、男女共同参画社会「市民一人ひとりが、お互いを大切に、性別にかかわらず、個性を輝かせて生き生きと暮らすことができる社会」の実現に向けた取り組みを進めています。

基本目標Ⅰ

一人ひとりが尊重される
まえばし

基本目標Ⅱ

みんなが主役になれる
まえばし

基本目標Ⅲ

多様なライフスタイルを
実現できる
まえばし

◆基本理念

- ・男女の人権の尊重
- ・家庭生活とその他の活動への参画と両立
- ・政策・方針の立案及び決定過程への男女共同参画の推進
- ・男女共同参画の視点からの制度・慣行の配慮
- ・市と市民と事業者の協働による推進
- ・国際社会の取り組みとの協調

主な内容

- ◆富岡製糸場と絹産業遺産群 世界文化遺産登録記念
・「玉糸製糸の先覚者」小淵しち…………… P 2
・お蚕様と生きる 小林さんご夫婦…………… P 3
- ◆地域で取り組む男女共同参画 大利根町編
・地域で育む「夏の学び舎」大利根小学校…………… P 4
・買い物支援でみんな元気「大利根マロニ工会」…………… P 5

- ◆育児・介護に携わる男性たち
・イクメンパパは介護も請け負う 塩澤智靖さん…………… P 6
・仕事と両立 母の在宅介護 春山敦さん…………… P 7
- ◆海外レポート、参画センターだより、編集後記…………… P 8

この情報誌は、市民ボランティア編集委員と前橋市が協働で作成しました。

本誌を通じ市民一人ひとりが男女共同参画を考える機会となれば幸いです。

前橋市男女共同参画情報誌「新樹」編集委員
前橋市男女共同参画センター 一同

前橋市の絹産業にかかわる人々

群馬は全国でも屈指の養蚕県。富岡製糸場ができたのは、本県が絹の原材料の繭の産地だったからです。時に前橋周辺は、江戸時代から養蚕、製糸が盛んでした。絹産業は、糸紡ぎや機織をはじめ、製糸工場の女工など、女性の職業として大きな位置を占めていました。

今回は、1870年代から製糸技術で愛知県豊橋市の発展に寄与した富士見町出身の小淵しち、現在も養蚕を続けておられる小林さんご夫婦にスポットを当てました。(取材・記事：池田・高坂)

男女共同参画の先駆け

「玉糸製糸の先覚者」小淵しち

前橋市はかつて「蚕都」と呼ばれた生糸の町。当時、もう一つ「蚕都」と呼ばれた町が愛知県豊橋市。ここを玉糸の町として有名にした人物が富士見町石井出身の小淵しちでした。この小淵しちの研究をしている古屋祥子さんにお話を伺いました。

15歳で製糸工場の糸引きに

小淵しちは1847年に現在の富士見町石井に生まれました。幼い頃から母のそばで糸引きを見てそれを覚えました。すぐに座繰りが上達、15歳で前橋の製糸工場で女工となり、腕を上げ、結婚後も一家の生計を支



(豊橋市美術館所蔵)
▲愛知県では「玉糸製糸の先覚者」と称えられた小淵しち。豊橋市では銅像も建てられている

その後二人は、三河にも製糸業を起こしたいと考える地元有志らと出

豊橋で製糸業を起業

しかし、糸引きで稼いだ金は夫の酒代に消えたりして、苦労が絶えませんでした。自立の道を探り、何度か家出を試みますが失敗。32歳の時、懇意な糸繭商人で同じ村内の中島伊勢松と共に出奔しました。二人はお伊勢参りを装い、愛知県三河町にたどり着き、その地の子女らに糸引きを教え生活を始めました。

出奔(家を出る)

えました。



▲「小淵しちものがたり」の著者 古屋祥子さん(富士見町原之郷在住)

会い、彼らに協力することになりました。そして、作業場を借りて自ら座繰り法を教えながら、製糸業を始めました。これが後に「糸徳製糸」という、最盛期には女工が千人の大工場に発展しました。

玉糸の誕生秘話

その間、幾多の苦難がありました。徳次郎(伊勢松を改名)が、二人の戸籍を偽造した罪で逮捕投獄され2年後に獄死しました。しちはその悲しみの中で、徳次郎が提案していた玉繭(蚕が2匹一緒で作った繭。糸を引き出すことが難しい)から糸を引く技術を確立します。これにより、くず繭扱いだった玉繭が立派な生糸になり、それを玉糸と呼んで、彼女は玉糸専門の製糸業に転換しました。それにより三河地方には玉糸製糸業が広まり、豊橋の発展の基となりました。

取材を終えて

しちは豊橋で成功者と讃えられ、一生を終えました。故郷を出て生きる手段とした座繰りの技が、群馬の評価を高め豊橋地方の発展に役立つことは、何より喜ばしいことです。

しちの群馬での知名度は高くありません。古屋さんは、しちの調査研究をされ、群馬における彼女の足跡や背景となる当時の前橋の製糸業などをまとめられました。しちの人生に共感する古屋さんの深い思いが伝わってきました。

*参考図書

『小淵しちものがたり』群馬歴史散歩211号〜214号 古屋祥子著
『ひとすじの糸』馬場豊著



第一絹電 全 製糸製糸会 町川二州三

(豊橋市美術館所蔵)

▲しちが愛知県豊橋市で発展させた糸徳製糸場最盛期には女工1,000人の大工場だった



「富士見かるた」より

前橋の養蚕を支え

『お蚕様』と生きる

小林さんご夫婦を訪ねて

現在も小坂子町で元気に養蚕を続けている小林さんご夫婦取材しました。夫婦や家族の共同作業が欠かせない養蚕農家の様子や、苦勞されたお話、良かったことなどを伺いました。

養蚕のことを教えてください

徳一さん 1年に春蚕、夏蚕、初秋蚕、晩秋蚕と4回育てます。蚕は卵からふ化し、4回脱皮後、糸を吐いて繭をつくり、これを繭玉として出荷します。昔は「種」から育てて



▶養蚕農家の小林さんご夫婦
向かって右が徳一さん、左がフサ子さん

いましたが、蚕は病気に弱く、消毒や衛生管理がとても大変でした。今は3齢まで共同飼育場で育ててくれるので品質が安定し、楽になりましたよ。

フサ子さん 蚕は桑の葉しか食べないので、桑採りがとても大事ななんです。「お蚕上げ（蚕を回転族（下写真）に移す作業）までは早朝の桑採り、給桑、糞の掃除、温度管理と休む暇もないです。次のお蚕のために桑の木の手入れも欠かせませんしね。

養蚕農家に嫁いだ頃は

フサ子さん 昭和32年に結婚した頃は、大家族で、多い時は十数人いました。養蚕をしながら一人で大家族の食事を切り盛りしてきました。和裁もできるのが当たり前だったんです。かまどで桑の枝などを燃し木にして、煮炊きをしていました。洗濯はタライ、最初は井戸だったので、家事だけでも大変でした。朝は1番早く起き、夜は終湯でした。

養蚕を続けてきて良かったことは

徳一さん 昔「お蚕上げ」の時は近所総出で助け合い、お茶の時など賑やかな楽しさがありましたね。養蚕は現金収入になるので、良い時はいろいろ助かりました。

フサ子さん 昔姑たちが座繰りをしていた良い収入を得ていた時がありました。どこの家でも姑たちの力は強かった。



▶綺麗な繭玉となるように飼育できる回転族蚕は上に向かって這う習性を活かして回るようになっている

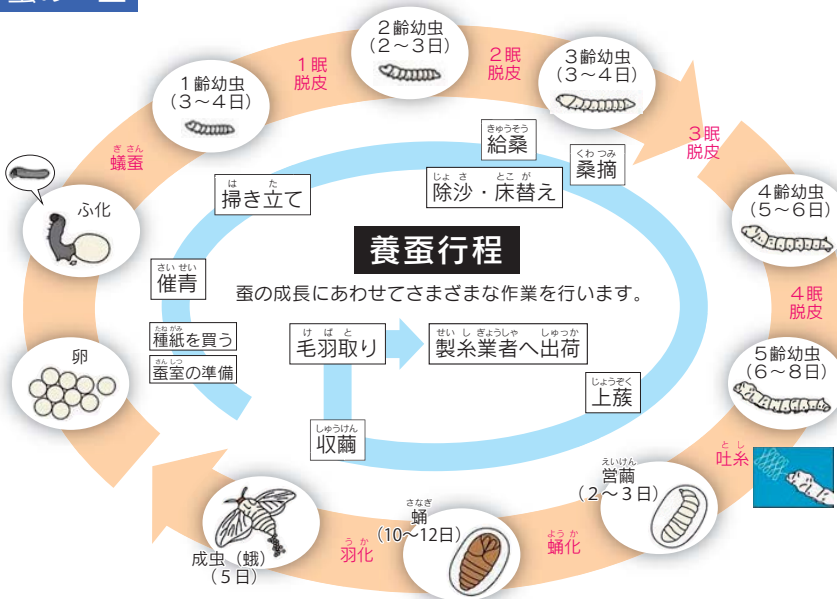


▶桑の葉を食べ大きく成長した幼虫

『蚕の一生と養蚕行程』

蚕の一生

蚕の一生はふ化してから約50日間。蚕は卵からふ化して、5齢の幼虫を経て繭を作ります。



(原案は安城市歴史博物館HPより)

たです。

以前は良質の繭玉を出荷するとその糸で織った白い反物を報奨品としてくれました。それを自分の好きな柄や色に染めてもらい、自分で手縫いして着物に仕立てました。それが自分へのご褒美でした。今も夫婦元気で養蚕ができるのもお蚕様のおかげかもしれませんね。

地域で 支え合い育む

子どもたちを見守るまなざし 地域とともに「夏の学び舎」

大利根小学校の取り組み

7月23日、大利根小学校（島津浩校長）の教室では、夏休みにもかかわらず、子どもたちが、黙々と机に向かい勉強をしています。そして教室の中に、教員の他に数人、子どもたちに分からないところを教えている人たちがいます。

お話を伺った
みなさん



関上さん



若田部さん



神谷さん



中道さん



亀山さん

利根川の西側に位置する大利根町。1960年代に県内初のモデル住宅地区として造成された、大規模戸建て団地でした。当時は、マロニエ並木に商店が並び、生活に便利な住宅街で、働き盛り世代の町でしたが、現在は高齢化率の高い町となりました。その中で、世代を越えた、住民同士の助け合いがみられるようになりました。

（取材・記事：熊田・鈴木・若井）

「夏の学び舎」について

平成23年度から始まった「夏の学び舎」は、前橋市立小中学校の児童生徒を対象として実施されています。夏休み中の教室を活用することにより、適切な学習環境の中で、児童生徒の学力向上への支援を図ることが目的です。

実施時期や時間、内容は各学校により異なり、教師のみで実施している学校やボランティアに協力依頼している等様々ですが、大利根小学校では、地域ボランティアを募って実施しています。平日の5日間で1日1時間と短い時間ですが、子どもたちからは意欲的な意見が聞かれ、効果が大きいことが分かります。

大利根小学校ではこの「夏の学び舎」をはじめ、地域の人々が学校に

積極的にかわり、地域全体で子どもを育んでいます。

ボランティアの方にインタビュー

「子どものために

自分ができることを」

本年度の「夏の学び舎」に参加されている15名のボランティアのうち5名の方々に話を伺いました。

若田部さんがリーダーを務める大利根町シルバークラブでは「夏の学び舎」以外にも、大利根小学校とかわりを持っていきます。野菜作りの苗植え・手入れの指導、昔遊びの伝承、書初め・そろばんの指導など、多くの場面で活躍されています。



▲地域の方が児童たちの学習を優しく見守ります

関上さんは、「子どもは小さいままずき・勘違いのまま覚えると、ずっと間違えたままになってしまう。間違いを教えるのではなく、気付かせてあげたい」と言います。

「普段仕事であまり一緒にいることができないので、夏休みはとことん付き合っただけ」と亀山さん。「子どもたちと親しくなると勉強以外の話ができる」と中道さん。「家でも働いているお宅の子どもをあげることもある」と神谷さん。

参加した理由は様々ですが、地域のため、子どものため、自分ができることをやろうとしている姿勢は年代を越えて同じだと感じました。



▲分からない点があればヒントを与えたりアドバイスをしています

【大利根町データ】	
(H26年8月末日現在)	
住民数	2,870名
構成	男 1,348名
	女 1,522名
65歳以上	1,089名(全住民38%)
75歳以上	636名(全住民22%)

超高齢化社会を支えるシニア世代 憩いの場と買い物支援でみんな元気

大利根マロニ工会



2011年から買い物支援活動に取り組む
大利根マロニ工会
会長 田中興一さん

があり、他の地域でも実践できそうな先進的な取り組みを行っています。

買い物支援を始めたきっかけ

流通機能や交通網の弱体化とともに、食料品などの日常の買い物に困難な状況に置かれている高齢者の「買い物弱者」が過疎地や大規模団地などで社会問題になってきました。そのような中、高齢者の買い物支援活動に取り組んでいる「大利根マロニ工会」を取材しました。

大利根団地は団地の中に商店街があり、生活に便利な住宅地でしたが、高齢化や人口減少、郊外型の大型店の進出により、シャッターを下ろす商店が続出しています。住民も高齢化が進み、「買い物弱者」が増えてきました。弁当や食材の宅配サービスを利用する人もいますが、「注文書の文字が小さくて苦労する」、「注文したことを忘れて、再度注文してしまっただ」、「味の好みが変わらない」など不満を感じていました。このような現

状を憂い、団地に住む田中会長を中心に活動の主旨に賛同したシニア世代に輪が広がり、会が発足しました。

憩いの場所作りと買い物支援

現在ボランティア会員は23名。利用者もほぼ同数です。

この活動は毎週水曜日に実施されています。午前10時に大利根町公民館に集合、約30分お茶を飲みながらおしゃべりを楽しみます。その後、車に乗車し、近所のスーパーに出かけます。一人で買い物に困難な利用者にはボランティアの方が付き添います。一人で買い物を楽しみたい人は、自分のペースで買い物を楽しみます。買い物終了後ボランティア車に荷物を積み、各自宅まで送ります。その後ボランティアの方々には公民館に戻り、反省会や打ち合わせをします。

「緊張感」と「達成感」が 担い手の生きがい

担い手であるボランティア会員は60・70代。現役引退後はどうしても平穏な生活になってしましますが、週に1日、仕事のような緊張感と人の役にたつという達成感を味わい、それが生きがいになっています。

広がるふれあいと笑顔

「皆と顔なじみになり友達ができただ」、「家族の介護の合間に送迎してもらえて助かっている」、「自分の目



▲「大利根マロニ工会」の語源になっている柿の実
大利根町公民館や大利根団地の大通りに多く植えられている

で商品を選べ、重い物や生ものも安心して買える」と笑顔の利用者さんたち。

運営上の様々な工夫

- ① 毎週必ず大利根町公民館で実施し、活動の形骸化を防いでいます。
- ② 多くの利用者は土日に子どもたちと買い物をするため、生鮮食料品等が不足する水曜日に実施しています。
- ③ 花見、紅葉狩り等も企画。担い手と利用者の交流の場となっています。
- ④ 運営費用…利用者から参加費1回100円を徴収。また、補助金の給付等を受け、公民館使用料、茶菓代などに充てています。
- ⑤ 万一のことも考え、団体として保険にも加入しています。

次世代へつなげるために

「これから超高齢化社会を支えていくことになる若者に、マロニ工会が教育の場になれば」と田中会長。取材したこの日も大学生がマロニ工会の活動を学んでいました。



① 担い手と利用者が大利根町公民館で30分程度、お茶とおしゃべり



② 公民館からボランティア車に乗車し買い物に出発



③ 近所のスーパーで、自分のペースで買い物を楽しみます

少子超高齢化



男性の育児・介護参加は 男女共同参画の「一丁目一番地」

少子超高齢化が進んでいます、その中で男性の育児・介護参加が求められています。

今回は、ご自身の闘病のかたわら、家族の育児・介護の経験をされた富士見町の塩澤智靖さん、仕事と母親の在宅介護を両立されている岩神町の春山敦さんにお話を伺いました。(取材・記事：鈴木・高坂)

闘病中のイクメンパパは 介護も請け負う

塩澤智靖さん



自身の闘病・親の介護・子育てを乗り越えた
塩澤智靖さん

「クモ膜下出血」で倒れる

妻の実家で共働きをしながら、妻の両親と2人の子どもの6人家族で過ごしていました。ところが、33歳の時に「クモ膜下出血」で倒れてしまいました。まだ長女が幼稚園、次女が1歳にもならない頃でした。幸い命に別状はありませんでしたが、先の事を考えると暗くなりました。退職し在宅ワークをしていましたが、後遺症で3年くらいは判断力・行動力が低下し、辛い日々もありました。しかし元々樂觀的な性格からか、目の前の現実を受け入れ前向きに歩もうと、リハビリに励みました。

義父が認知症に

同じ頃、今度は6代後半の義父が認知症を発症しました。義父の発症

に関して当初家族は誰も気が付きませんでした。しかし、ある時、外科の手術で入院した病院先から抜け出し、してしまいました。又、庭師の仕事をしていましたが、自宅の植木の手入れをしていて落下したり、仕事先がわからなくなったりと異変が生じ、病気になる事に気づきました。

リハビリを兼ね子育て、介護専任に

これからの子育てや介護のことを夫婦で話し合い、妻はこのまま仕事を続け、私が闘病のかたわらリハビリを兼ねて育児や介護や畑仕事をすることになりました。

義父の介護は6年間。当初在宅で3年間介護をしていましたが、徘徊等症状が進んだため、幼い子どもを抱えての介護が難しくなってきました。そのため入院後施設に入所し、70代の半ばで亡くなりました。義父の介護をしながら、地域との繋がりが多かったです。

育児は長女が幼稚園の時期からでしたが、朝食は妻が準備をし、洗濯は義母が担当しましたので、子ども

たちの着替えや食事の世話、幼稚園の準備や送迎が主でした。次女の離乳食も、長女の時ほど神経質にならずにできました。

自分が健康な頃は、家のことをほとんどしませんでした。学生の頃一人暮らしを経験しているので、家事も何とかこなせました。

子育てが力に

三世代同居の環境で子どもの成長と親の老いが同時進行でしたが、特に子どもの成長にかかわれたことは自分にとっても大きな力となりました。子どもたちは父親が家にいて、母親が働いている環境や祖父母の「おい」も当り前ととらえていたようです。妻は物にこだわらない性格なので、過剰な配慮がないことも家族全体が自然体で過ごせた一因かと思えます。私自身も気が楽でしたね。

私の在宅中に長女が入学し、PTAにも私がかかりました。皆さんが「子煩悩なお父さん」という捉え方をしてくれて、子ども繋がりで人脈も広がり、色々な人間関係ができました。

私自身5年位闘病がてら子育てや介護で全くの在宅生活でありましたが、その後リハビリを兼ねて比較的時間に余裕が持てる職種に就労し、3年前から現在のフルタイムの仕事に就きました。

現在長女は大学生、次女は高校生となり、長男が増え今も6人の大家族です。

塩澤さんからのメッセージ

育児も介護もあまり力まず、手の届くところから始めましょう。

ケアメン

仕事と両立 母の在宅介護 春山 敦さん



介護と仕事を両立
春山 敦さん

仕事と母親の介護を両立させている春山敦さん。現在、ともに8歳の両親と3人暮らしです。サラリーマンを退職し、行政書士の資格を取得。2年前に自宅を事務所に開業しました。ワークライフバランスの観点を踏まえお話を伺いました。

家事をこなしていた母の様子がおかしい…

私が退職した時期に合わせるように、母に認知症状が現れました。当初は高齢による「物忘れ」程度の認識でしたが、そのうち買いただめがひ

相手（妻・夫）の話をよく聞いてあげましょう。子育て、介護は孤独です。聞いてもらっただけでいいのです。子どもはできるだけ抱っこしてあげることで、心が安定します。介護は他人事ではなく明日は我が身の問題なのです。

どくなり、幻覚・妄想の症状が出てきたため、医療機関を受診しました。その後体重が減り、体力が非常に落ちてしまいました。

問題行動

しばらくして体力は戻ったのですが、元々足腰は丈夫なので、思わぬ時に徘徊行動が出てしまうようになりました。酒屋さんで必要ない酒を買って来てしまったり、考えられない遠方で保護されたり、スーパーで買い物してお金を払わず出ようとして通報されたりと。ただ、一日中見守ることはとても大変なものです。

最初は落ち込みましたが、最近は少し余裕をもって対応できるようになりました。また、怒ると物をひっくり返したりするので、後片付けが大変です。さらに大変なのは排便の処理です。自力で排便が出来ず、意思表示が出来ないので、ソファーに

座ったままもらしてしまいうこともあり、対応に苦慮しています。

本人・家族の思いを繋ぎあつて

現在は生活全般にわたって全面的な介助が必要な状態ですが、週2回のデイサービスだけを利用していません。ケアマネジャーさんにはデイサービスの利用を増やすとか施設入所を勧められます。しかし、現在母の症状の進行が緩やかなことや、できる限り家族一緒の時間を過ごしたいことなどから、今は様子を見ていく状態です。

父・息子で家事と介護

料理は父がご飯と味噌汁、私がおかず作りを担当。細かい掃除は週一度来る妹がします。母の下着の買い物の際は困りますが、妹が同行してくれるので有難いです。

妹を含め家族一緒に食事をする時の母はとても嬉しそうな表情をしますし、機嫌の良い時は介助なしで食べられることもあります。

仕事と介護の両立は難しい面もありますが、自宅が仕事場のため、時間の調節はしやすいです。今は介護の比重が少し多いので、できればもう少し仕事の比重を増やしたいです。今必要と感じていることは、急な仕事が入った時などに見守りなどをちょっと頼めるシステムがあるといいなということですね。

近隣の支え

昔からの付き合いのある地域なので、ご近所の皆さんは母の状況を理解してくれています。徘徊に気付いた方が止めてくれたり、時々顔を見に来てくれたりと、家族としてはありがたいです。

春山さんからのメッセージ

「おかしいな」と気づいたら早めの治療が必要です。

自分一人で抱え込まず、包括支援センターなどで相談してください。介護サービス等を上手に利用し、時には介護と全く関係ない時間を持つことも精神的にバランスを保つうえで必要であると思います。私はハイキングに出かけたり、「のんびり介護&行政書士業務日記」というブログを書いて気分転換をしています。

豆情報

ケアメン(親や妻など家族の介護を担う男性)

今や介護者3人に1人は男性の時代です。全国で男性介護者のネットワークが広がってきました。

～ひとりじゃない、とわかった時、生きる勇気がわいてきた～

「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」

<http://dansei-kaigo.jp>

問合せ先
〒603-8577

京都市北区等持院北町56-1
立命館大学人間科学研究所気付
TEL&FAX: 075-466-3306

アクセス
して下さい。



海外レポート～地球あちこち見て歩き～

船で地球一周した、編集委員の池田榮一さんのレポートを掲載します。



アイルランド編

アイルランドの歴史は重い。12世紀以降イングランドの勢力下に入り、ピューリタン革命時にはクロムウエルによって収奪され、カトリック教徒の農民はイギリス人不在地主のもとで貧困を強いられました。1800年代の大飢饉の折も大量の餓死者が出ました。その結果、アメリカへの移民が続出。ケネディやレーガンなどアメリカの有名人の祖先がアイルランド出身という背景には、こうした歴史があります。

最近のアイルランド紛争も100年に及ぶ紛争です。お互いのアイデンティティをめぐって争ってきただけに、根深い憎悪と嫌悪を抱き合っています。いつまで暴力攻撃をし合っても解決しない以上、残された方法は話し合いしかありません。現在、平和団体は「歴史に学び、教訓を得て過去を繰り返さない。そして新たな始まりを作る」ために、若い人を対象に紛争解決を教える教育に力を入れているということです。

しかし、私が歩き回ったダブリンにはローカルな雰



総面積：7万3000km²
人口：約459万人
首都：ダブリン
公用語：アイルランド語、英語
2013年の男女格差を測るジェンダーギャップ指数は136か国中第6位。(上位ほど格差が少ない。日本は105位)

▶ダブリン市にある飢饉追悼碑
19世紀のアイルランドで起きた「ジャガイモ飢饉」の餓死者を追悼する碑
この飢饉で当時の人口の30%以上の人が餓死・病死、国外移民した



気がありました。タクシー運転手さんと話をすると、田舎のおじさんが持つ人の良さに似たものを感じました。街の理髪店にも行き散髪体験をしてみました。私の英語は片言ですが、常連客とおしゃべり中の床屋のマスターは「OK」と答え、マダムが伸びすぎた髪を丁寧にカットしてくれました。仕上がったのか、私の眼鏡を返して何か言いました。切り具合を聞いているようなので、「モア・ショート」と言ったら、再度丁寧に短く切ってくれました。代金は14ユーロでした。世界旅行中だと言って国名を列挙したら「Unbelievable!」と聞こえたから、多少は会話になっていたようでした。

他国の人々の日常生活に触れてみることは楽しい。日常の中に互いの違いや共通点を見出し、相手を受け入れようとすれば共生の道は開ける、と私は楽観しています。

男女共同参画センターだより

みんなで男女共同参画を考える機会に 男女共同参画セミナーを開催

講師
林 真理子 さん
(作家)



演題
私の仕事から

日時：平成26年11月26日(水)
午後6時30分～8時30分(午後6時開場)
会場：前橋市総合福祉会館 2階 多目的ホール
対象者：一般市民(市内在住・在勤・在学)
定員：500名(抽選)
受講料：無料
主催：前橋市 前橋市労働教育委員会
申し込み方法
往復ハガキで下記までお申し込みください。(10月31日金消印有効)
〒371-0023 前橋市本町一丁目5-2
前橋市男女共同参画センター宛

編集後記



(あいうえお順)

◎養蚕製糸業の取材を通して、改めて群馬の女性の実力と苦勞がわかりました。性差を理由にした意識と慣習とが変れば、群馬の女性力はもっともっとアップ。 【池田 榮一】
◎10年前は私も小学生だったのに、学校の環境が大きく変化しました。社会の変化には、その都度その都度対応していくことが大切だと感じました。 【熊田 汐季】
◎今回は養蚕農家を取材しました。群馬の絹産業遺産群が世界文化遺産に登録されましたが、基盤である養蚕業と、かかわった人々の営みも忘れてはいけません。 【高坂 均】
◎養蚕県群馬・糸のまち前橋 その発展を支えたのは女性の力でした。少子超高齢社会を支えるのは性差・世代を越えた手の届くところからの協力ですね。 【鈴木美知子】
◎本誌が全戸配布になって2日目。前橋の男女共同参画もこれからが本番。今回の取材を通じ、行政の取り組みだけでなく地域・個人の手も必要だと感じました。 【若井 宗則】

発行日：平成26年10月15日 編集：「新樹」編集委員
発行：前橋市 生活課 男女共同参画センター 〒371-0023 前橋市本町一丁目5-2 職員研修会館1F
直通電話：027-898-6517 FAX：027-221-6200 メールアドレス：sankaku@city.maebashi.gunma.jp

「新樹31号のご意見・ご感想をお待ちしています！」

新樹第31号・2014年10月15日 8